

人生の最期に……イギリスで

●ホスピス・ケアを自宅へ届ける

一九八八年秋のことでした。ある日、「これをまさに英国紳士」とつつとりしてしまうような、ひとりの外国人が私を訪ねてきました。

「英国大使館は、貴女様を選ばせていただきました。二週間ほど、英国にご招待したいと存じます。どうぞ、ご覧になりたいものを遠慮なくおつしやつてください。オペラの席も用意させていただきます」

折り目正しい日本語でした。

私はあつげにとられました。まるで、シャーロック・ホームズの「赤毛連盟」です。あの場合、幸運をもたらした男の正体は、実は銀行破りだったのですが、私の場合は、まされもなく大使館の一等書記官でした。

私は、ときまきしながらも、次のような希望を述べました。

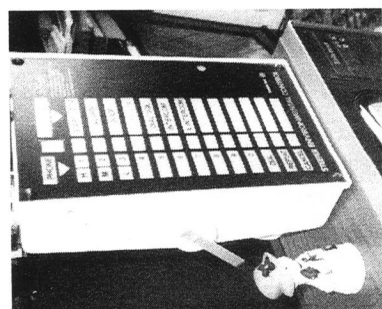
「死を間近にした人、体の不自由な高齢者、精神病の人がどのように遇されているか、その現場を見せていただきたいのです。こうした人々がどう遇されているかで、その国の豊かさが計れると思いますので」

一九八九年の初春のイギリスの旅は、こうして始まりました。

リニアで携し移動がなくても、自宅で行う



携わらずで、本館の案内テレビの操作電話の袋が使える仕掛けが彼女を助けています



まず、北ロンドンホスピスを訪ねることになりました。そこは、ロンドン郊外の住宅街にある邸宅風の建物でした。

ホスピスというと、「死を迎えるための特別な施設」と想像をする人が、日本には多いのですが、この北ロンドンホスピスにはベッドは一つもありません。ここを拠点にして、スタッフが自宅で死を迎えようという人々と家族を、二四時間態勢で支えているのです。

中心人物の看護婦のハリエット・コッパマンさんは言いました。

「この国の人々は、できるだけ自分の家で息を引き取りたいと願っています。入院させたら、ご夫妻を同じベッドに寝かせることもできません。犬をつれていくこともできません。長年愛しあつた家族におよぶ看病はありません。ですから私たちは、熟練したホスピス・ホームケアを自宅に届けるのです」

医師と看護婦は、死を間近にした患者を自宅に訪問し、苦しみを和らげることで、専門家の技量を発揮していました。

「今までにお世話した患者さんが持っていた苦しみを救えたら、五七種類にもなりました。吐き気、痛み、息切れ、便秘、せき、不眠、失禁……」

私たちはスペシャリストとして、こうした多くの苦痛に対処できる力を持っていなければなりません。たとえば、医師のマギーは、末期がんの患者さんのお腹に溜まる液を体外に出す腹水穿刺を、患者さんの自宅で手軽

に行なう方法を考えだしました。患者さんはとても喜びます。痛くありませんし、病院に行く必要もないからです。こうした処置を受けるためだけに入院したり、車にゆられて通院し、待合室で長時間待たされたりするのは、命に限りがある人には酷いことです」

医師も看護婦も白衣はつけません。友達という感じで訪ねます。英国には家庭医と地区看護婦のネットワークが公的にははりめぐらされているので、この人々とも連携をとります。病院とも連絡を密にします。

八四年、彼女は自分の家の空き部屋を連絡所にして、この仕事を始めました。集まったのは、彼女を含め看護婦二人、医師一人、秘書一人でした。それが、私が訪ねたときには、医師一人、看護婦四人、ソーシャルワーカー二人、それに三五人のボランティアにふくらんでいました。

ボランティアの役目は、通院の送迎、買物や散歩の同伴など。ソーシャルワーカーは、患者と家族の抱えている精神的、社会的、経済的な問題の解決を助けます。ボランティア志願者の中から、この仕事にふさわしい人を選考したり、訓練したりもします。善意を押しつけるボランティアは困るからです。

今、自宅で死を迎える人は、英国全体では30%。でも、この北ロンドンホスピスが受け入れた患者に限ってみれば60%にもほのぼののです。

我が家で、母の腕の中で安らかに息を引きとつていった子どももいました。

ホスピス・ホームケアは、人生の最期に関するノーマリゼーションだ、と私は思いました。

●まず本人の選択。たとえそれが死を招くものでも

「大切なのは、ご本人の選択です。盲目の男性がいました。訪問看護を三週間ほど続けたとき、『ひとりにしてほしい』と彼は言いました。訪問は中止されました。患者さんの希望は、それがどんなものであれ、

私たちはそれに従います。ソーシャルワーカーのデビッド・オリビア氏(写真上)は言いました。

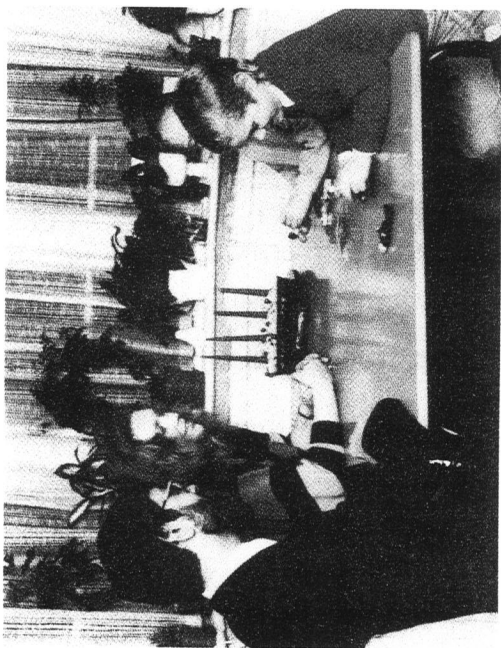
私は英国のあちこちで、「本人の選択」を徹底して重視する姿勢に、驚かされました。市役所のソーシャルワーカーに同行して、独り暮らしの高齢者の家を次々と訪問したときもそうでした。

七八歳のNさん。朝まだ早い時間なのに、お酒の臭いをブンブンさせています。重症のアルコール依存症らしく、家の中は荒れはてています。ソーシャルワーカーは、そんな彼女の話をていねいに聞いただけです。指図がましいことはまるで言いません。家の外に出てから、ソーシャルワーカーにそのわけをたずねたら、こんな答えが返ってきました。

「あノレテイーと知り合つてまだ数カ月です。私たちが何をすることを彼女が許すのか、それを見つけている最中なのです。この病気は、患者さんが病気を知り、治したいと思わなければ治せません。今は、とりあえず、週一回の掃除をしてさしあげています」

イエス様がお年を召したという容貌の、七六歳の元公務員O氏。真つ暗な部屋でベッドにもぐりこんでいました。

「あの家には蛆がわき、体は虱でいつはいです。でも、死ぬまでこの家で暮らし続けたい、そう言っているクライアント(依頼人)の意思は尊重しなければなりません」



医療ソーシャルワーカーが、残される家族の相談相手になる。これもホスピス・ホームケアの大切な仕事です